
闘争の渦【長期休載中】

朝倉 由那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闘争の渦【長期休載中】

【Nコード】

N5494C

【作者名】

朝倉 由那

【あらすじ】

地球ではないどこかの世界。その世界では戦争が繰り返されていた。しかし、その戦争、我々の知る戦争とは大きく違っていた。その戦争とは魔術戦争。常人には不可解な力の戦争であった。魔術師の前ではあらゆる兵器は無力と化し、魔術師の力がその国の戦力と同義であった。魔術師の扱う魔術カードと呼ばれる宝具。そして、二人の戦士。幾重にもかみ合った歯車が動きだす。力は力呼び、闘争の渦を生み出していく。異世界ファンタジー、ここに開幕。

申し訳ありませんが、現在は『魂ヲ喰ライシ者』（の方に力を入

れたいため、こちらの方はしばらく更新出来ません。なので無期限
休載にさせていただきます。作者の勝手で、本当に申し訳ありません。

File・00「封印の魔剣」（前書き）

二重の想い Double Wills の代わりに始まりました。作者の勝手にこのような事態にしまい、本当に申し訳ありません。

割と書ける方だと自負しているファンタジーもので腕を磨いていこうと思います。まだまだ稚拙で幼稚な小説ですが温かい目で見守っていただければ幸いです。

File・00「封印の魔剣」

「よっこらせつと……………我ながらジジくさいな」

箱にしまわれた大量の本を床に置くと、膨大な量の埃が舞い上がり視界を覆う。何年もの間、手入れもせず放っておいたのだから当然と言えば当然のことである。彼が片づけに苦労しているのは理不尽でも何でもなく因果応報なのだ。

「全く、ジイちゃんもこんな沢山、本をため込まなくてもいいのに」
今は亡き祖父にどうしようもない文句を垂れる青年。

彼が片づけに奔走する書物、物品の数々は、元々は彼の所有物ではなく祖父の遺していった遺産、またの名をガラクタと言う。彼にとつては無用の長物であり、この先必要になることもないだろう、と考えていた。しかし、仮にも祖父の忘れ形見だ、片づけぐらいはしておこうと考え、長い旅立ちを前にして倉庫の片づけに精を出していた。

「……………【精霊と属性についての考察】……………【伝説の魔物と聖獣の生態】……………【歴戦の魔術師たち】……………パティに見せたら喜びそうな本ばかりだね」タイトルを眺めながら彼は呟く。普段、読書などはあまりしない彼にとつて縁も所縁もないその品々、それを開いて乾燥した羊皮紙に綴られた漆黒の文字を眺める事は頭痛を呼び起こすだけである。

「というか、三歳も年下なのに、こうも差が出ると男としては情けないような気がする……………」

あまりにもよくできている血縁を思い出し、懐かしい記憶に意識を傾けつつも手の動きを止めない。出発は近いのに片づけはサッパリ進行していない。彼の手際が悪いのか、はたまた、祖父の倉庫には散乱の魔術でもかけられているのか。無論、片づけがサッパリ進まないのは彼の責任である。既に休憩をとった回数は彼自身も覚えていない。

「……………パティ、元気にしてるかな？」

幼き日々の記憶が脳裏を掠めては去っていき、彼の意識を幼少時代の風景へと誘うがそれを振り払う。出発の期限は待つてはくれず、また彼を急かす者も今はいない。自身を急かさねば大変な事になつてしまふのは彼自身がよく知っていた。

「えーっと、この壺は……………ここでもいいか。この角笛は、この箱の中か」祖父の遺した品々は、全てが本のように片付けやすい代物であるはずがなく、壺や椅子、胸像などといったかさばる物も多々保存されていた。

「……………うわっ、何で鹿の剥製なんかがあるんだ？」

彼はこのような品々を既に一週間ほど片づけている。けれど、片づけようが逆立ちしようが終わりは一向に見えてこない。今まで少しも整理してこなかった過去の自分に無駄な呪詛を投げかけながら黙々と手を動かす。埃と煤で真っ黒になった彼の手は普段使っていない部位も活用しているため、些か筋肉痛に陥っている。

「まったく、ジイちゃんもつまらない物を遺してくれたよ。僕だってこんな物いらな^{ガラクタ}いのにな」祖父の遺した遺産の数々を整理しながら呟く。広い倉庫だが、物と埃で溢れ返っているため声は反響せず、吸い込まれて消えていった。

「……………せめて、戦争で役に立つ……………物でもあればな」

“力が望む者よ、我を欲するか”

「へ？」

彼は振り返る。しかし、そこには誰もいなくあるのはガラクタばかりだった。完全に人の気配が無かったため、彼も気のせいだと考えた。この世界において見えざる存在は畏怖の対象ではなく、また見えざる存在がいたら気配で分かる程度には世界の住人も感覚が磨かれている。

「気のせい、か」人の気配は完全に無い。人どころか、ネズミ一匹の気配すらない。

“我が力を望む者よ、ルーファウス・グランドリオンの血を引く者よ。汝の願い、我が叶えよう”

「うえ？」再び振り向く。完全に空耳ではない。しかし、相変わらず人の気配はゼロである。彼の気配を読む力は割と良い方だ。それは彼の周囲にいる優秀な人物たちのお墨付きだ。

そして、その何かは彼の祖父であるルーファウス・グランドリオンの名を知っている。その言葉が彼から恐怖をぬぐい取る。その名は彼に力と勇気を与えてくれるものであったからだ。

「だ、誰かいるのか？」そこにいる存在が『人』でない事は彼の直感が告げていた。それでも、そこに在る存在は彼が解する事のできる言語を発している。ならば、声をかければ返事が返ってくるだろうと考えた。

“我は封印の魔剣・レーヴァテインなり。我が力を欲する者よ、我が封印を解き放て”

「封印の……魔剣？」声の聞こえてくる方を眺める。彼の祖父が遺した遺産に混じってキラリと光る物が彼の眼に飛び込んできた。ガラクダそこにあるのは、紛れもなく剣であった。重い品々が上にのしかかっていたが、その刀身は一ミリもしなずにピンとしている。大人の男一人が片手で操るには十分な長さを持っている片手剣であった。

「こんな剣、あつたっけ？」剣を拾い上げて両手に持つ。

“我が力を欲する者よ、封印を解くがよい”

「ふ、封印って言っても、僕は魔術も何も使えないのに……」
慌てて剣をひっくり返す。しかし、そこには何も無く表の傷一つない刀身と全く同じ面が輝いていた。柄の先に深紅の宝石が埋め込まれ、柄は片手で持つには十分だが両手で持つには足りない長さである。

“ 我に続いて呪文を唱えるがよい。もし汝に我を扱う資格、力が備わっているのならば、言葉は自然と力を帯びる…… 『混沌の力を秘めし剣よ』 ”

剣から発せられるこの後半部分の口調が低くなる。彼はそこから繰り返すのだと解釈した。

「こ、混沌の力を秘めし剣よ……」 彼は素直に剣の発する声を繰り返す。

“ 『陽の光は我が心の輝き、陰の影は我が心の暗がり』…… ”

「陽の光は、我が心の輝き、い、陰の影は、我が心の暗がり……」
彼は剣の言葉を忠実に繰り返していく。

言葉自体はいたってシンプルであるが、一言唱えるごとに内から奇妙な力が溢れ返り、もう一言唱えるとその力が渦となる。

“ その身に宿りし真正の力、我が身に宿るはその派生 ”

「その身に宿りし真正の力、我が身に宿るはその派生……」

“ ここに、我は汝と契約を結び、汝を戒めし封印を解放する ”

「ここに、我は汝と契約を結び、汝を戒めし封印を解放する……」

“ 封印の魔剣よ、我が呼びかけに応え、真の姿を我の前へ示せ ”

「封印の魔剣よ、我が呼びかけに応え、真の姿を我の前へ示せ……」

……」

一つの言葉を紡ぐと同時に、一つの力が彼の中に渦巻く。二つの言葉を紡ぐと、二つの力が彼の全身を駆け巡った。

一言、その力が内より溢れ返る。

二言、その力が彼という器の中で渦巻き広がる。

三言、その力の渦は彼の内から外へと向けて方向を変える。

四言、その流れは彼の全身を奔走し、彼の意識を力へと萃めていく。

五言、その力の奔流は彼を魅せながら、封印を解くべくして刃へと萃まっていく。

“ 汝との契約、ここに完了す。真正の魔術剣・レーヴァテインよ。長き眠りから目覚めよ！”

「 汝との契約、ここに完了す。真正の魔術剣・レーヴァテインよ……長き眠りから目覚めよ！」

六言、最後の詠唱と共に莫大な力の奔流が剣を通して、現生へと具現化した……

File・00「封印の魔剣」

著者：ユナ・アサクラ

File・00「壊滅の神槍」

「警告！ 魔術師一個師団が目前まで迫っています。……………くそっ！ こいつはリーダーを無効化してる。盾使いが一人は確実にいます！」モニターの前で叫びだす賢そうな顔立ちの男。耳にかけた通信機で様々な分隊に現状の報告を急いでいる。

報告自体は些か以上に危機が迫っている事を現しているが、彼を含め、その場のほとんど全員は慌てていない。

「おい、盾のカードにはどれだけの魔力を込めればあらゆる干渉をシャットダウンできるんだ？」彼は隣に立つ可憐な少女に尋ねる。と言っても、少女と言うには些か以上に大人びているのだが。

「……………最低二万八千五十四」少女が少々考え込みながら答える。

「大した魔術師でもねえな。せいぜいA A + ってとこだろ」彼は首を鳴らしながら呟く。

彼の言葉に周りの者は表情を変化させる。ある者は畏怖の表情を浮かべる。ある者は尊敬の眼差し。そして、またある者は嫉妬の視線を。彼はそのような表情を自分に向けられるのは慣れていたため、特に気にかける事もなくモニタを眺める。

「ったく、あそこはエーリンの管轄だろ？ また飯でも食いに行くってんのか？」

「彼女は今日非番」

肩を竦める彼と、淡々と答える彼女。目の前で様々な色で目まぐるしく点滅するモニタは揃って【警告】の文字を表示して、自らを操る人間に迫りくる危機を告げている。

しかし、誰も行動を起こさない。なぜならば、そこにいるほとんど全員が現在起こっている事態を危機とは感じていないからである。危機とは、自らの命、及び仲間、自らの所属する組織の存在がこの世から消し去られても不思議ではない状況の事である。そこにいる

全員にとって、現在はそのいずれにも当てはまらない。

「ヴァレンタインよ。今からでも行けるか？」その場でモニタを見つめる人間の中でも一際高い位置にその席を設けている初老の男性が彼に言葉を投げかける。

「分かりきつてる事聞くなよ、国王さん」彼は軽く返事をする、腰に下げた革製の特殊な入れ物に手を当てる。

「エアーのカードばかりつかつてると椎間板ヘルニアになる」それは、足腰を使わないと体に悪いという事なのだろうか。無論、そんな冗談を真に受ける彼でもないし、それを少女もしっかり把握している。

「王国軍率いる【白銀の鬼神】が椎間板ヘルニアなんかで倒れた暁には皇国軍のお偉いさんはぶっ倒れちまうな」

「仮にも【エース オブ ザ カード】の異名を持つんだ。そんな病気じゃ倒れないさ」

彼の周囲の同僚もそれを分かっているため、「冗談を冗談として受け止めている。もはや、現状が一般的に見れば危機的状況であることをその場の全員が忘れ去っている。

「うるせえよ。俺だってカゼは引くし、怪我もする」彼はその白銀の髪を靡かせながら、背中にした得物を抜き放つ。彼のみが操る事のできるとされる強力な宝具、壊滅の神槍・グングニルを。

「それにしても今日はよく喋るな。なんか悪いもんでも食ったか？」

「……………今朝の牛乳は賞味期限切れ」

「……………腹壊すんじゃないぞ、レミィ」

彼らはほんの短い間で互いの意志の疎通を感じる。彼にとっても少女にとっても二人の長い付き合いからすればその一瞬で互いの考えなど簡単に読み取れるのだ。

“ 空よ、我が存在をその流れに委ね転移させよ！ ”

「じゃ、行ってくる。……………エアー!!」

【エア空】

その言葉と共に彼の周囲に強力な流れが渦巻き、一陣の風が彼を別座標に転移させた。

「ヴァレンティンさん！ 急いでください！！ もう皇国軍はそこまで迫ってきています!!」

「到着早々うるせえよ」彼は、耳元に放たれた不意打ちにクラクラしながら呟いた。王国軍一の魔術師とは言え、鼓膜に直接攻撃を放たれたら一撃必殺レベルのダメージを受けてしまう。

「ですが、既に皇国軍の一般兵は我が軍と戦闘を始めております！ 上級魔術師は敵軍の後列で待機しておりますがもうじきに進行を開始するものと思われます！」

「だからうるせえって」部下の報告する現状を右から左へと聞き流している彼。そんな彼の様子を見ながら部下の方はイライラしている。

「ですが……………」

「あゝ、分かった。今すぐやれば良いんだろ？」

部下の焦り具合に嫌気がさしてきた彼はグングニルを構え腰から紙片を一枚抜き出す。

「敵は広範囲に渡って広がっています！ 並なカードではどうしようもないですよ！ 何のカードを使うんですか？」

「俺を誰だと思ってるんだよ？ まあ見てろって」彼は小さく構え、と手に持った紙片を二枚合わせ、槍の穂先に重ねる。

刹那。グングニルが光を放ち、漆黒に変色した。

ダブルマジック
「二重魔術！！」

“水よ、全ての願いを精霊、ウエンディーネの名の下に集め、万物を清める清流の流動を呼び出せ！我が同胞を襲いし宿敵を清めの流れて薙ぎ払え！”

通常では唱える事すら難関とされる超高位魔術の詠唱分を一気に読み解く彼。その域はもはや人のそれを脱しており、異名の【白銀の鬼神】というのもあながち間違いではないのかもしれない。

「くらえ！一撃必殺！！ウエンディーネ・スプラッシュュ！！」

ウエンディーネ・スプラッシュュ
【精霊水】

詠唱と共に高まる魔力を紡ぎ合わせ、周囲に放出する。解放された魔力エネルギーは槍の穂先に浮かぶ紙片を通して透き通る水流へと変換された。常人には理解できない程の膨大な力が一瞬で広範囲に広がっていき、水流に込められたエネルギーが圧縮される。

「す、凄いです、ヴァレンティンさん！！」

上官の発動させた力の膨大さに驚愕し、尊敬の眼差しを向ける一般兵士。その力の強大さは遥か雲の上、と形容してもまだ足りない程の力である。

「……………いや」

「へ？」彼の言葉に首を傾げる一般兵。

“万物の因果を断ち切り、我が身体を守護せよ！”

「止められた」彼は槍を構えると、水流の行き先を見る。そこにいたのは一人の少女であった。

「シールド！！」

シールド
【盾】

強大なエネルギーが展開され、少女の前に充満する。その力は強固な壁となり、盾として少女を守護する。

「まさか、ヴァレンティンさんの精霊魔術を？」一般兵が驚愕と共に少女を見る。

少女の展開させたシールドは彼の放った膨大なエネルギーを秘めた水流を真正面から受けて、そして弾き飛ばした。それでも、彼の水流は有り余るエネルギーを周囲に放出し、少女以外の兵を押し流し吹き飛ばしていく。

「ちっ！」彼は槍を構えると跳躍し、少女へと一気に迫る。

「くっ！！」少女は後ろへと跳躍し、槍の一閃を紙一重で避ける。

「遅い！！」彼は回避不可能とも言われる超絶な槍捌きで神速の斬撃を放つ。

ダブルマジック
「二重魔術、ディフェンス！！」命中、いや、即死は避けられないと判断した少女は紙片を二枚重ね周囲に力を展開させた。

ディフェンス
【守護】

ガキイイ！！

「！？」彼は自らの目を疑う。彼の持つ宝具、壊滅の神槍はその名の通り『破壊』と『滅却』を導く神の力を秘めし槍である。半端な防御など熱したナイフをバターに入れるよりも低い抵抗で切り裂くそれを、この少女は止めた。彼が今まで出会った事のないほどの力で。

「二重魔術を無声詠唱、か。……………面白い。お前、名前は？」

「……………パトリシア・グランドリオン。あなたは、エドワード・ヴァレンティンね」

強者の持つ勘が告げていた。生半可な気持ちでは一瞬で殺られる

と。その勘は強者が強者であるが故の勘であり、幾度にまで重ねた戦闘で磨かれたその直感の外れる事がほとんどない。

「……………グランドリオン、行け。いずれまた会おう」彼、エドワードは槍を下ろし、彼女に背中を向ける。その言葉は本物であり、罠ではない。

「そうね。お互い、準備を整えてからやり合いましょうか」少女は紙片をしまうと、彼に背を向ける。お互いに分かっていた。相手の言葉が偽りでは無い事を。

「ヴァレンティンさん！ どうして逃がしたんですか！？」いきさつを見ていた一般兵が尋ねる。その兵も彼と少女の間に立ちこめた不可視の力になす術がなかったのであるが。

「逃がしたんじゃない。逃がしてもらった。……………今の状態なら殺られていたかもしれない」

彼は振り返る。少女は既に遠くへと転送しており、その姿は無かった。

「ヴァ、ヴァレンティンさんが負けるはずないじゃないですか」

「本当にそう思うのか？」

彼が追及する。その瞳は本気であり、皇国軍一の戦士が発した勝利以外の言葉を初めて聞いた一般兵は、何も言う事が出来なかった。

「パトリシア・グランドリオン。ルーフアウス・グランドリオンの孫か」

彼は戦場を後にする。既に戦いは終わっていた。彼の放った水流は少女以外の人間全てを薙ぎ払い、その命を奪っていたのだ。

File・00「壊滅の神槍」（後書き）

ということが始まります。魂ヲ喰ライシ者とは違い完全にシリアス一直線です。三人称なのでシリアスにしやすいです。ジャンルはファンタジーでもよかったのですが、戦争を戦略などを通して書くうと思ってるので戦記にさせてもらいました。ですが、内容はあくまでファンタジーです。

見ての通り、二つの流れを同じ時間軸で追っていきます。今回のように二話同時に投稿したり、片方ずつ投稿したりします。それでは、今後とも応援していただけたら幸いです。

File・I「遭遇した強敵」

その日は快晴であつた。彼の上官が言うには、風向きも良く絶好の交戦日和らしい。

「魔術戦争に良い日も悪い日もないと思うけどね」彼は誰に言うでもなく独り言を言う。小声で呟いたため彼の周りにいる仲間は当然の如く彼には気を回さない。ただ一人、いや、ただ一振を除いては、ひとり「そうは言つてもな。天候は戦況に大きく影響するぞ」

「僕はまだランクAにもなつてないんだから、そんなの分からないよ」彼は、手に持つ剣から発せられる言葉に言い返す。

「そこまで腕を磨くんだな」

「……………遠距離班！　一気に攻めるわよ！　属性魔術用意！」

剣の言葉が終わつたのと同時に、凜とした声で軍に指示が出される。彼の聞き慣れたその声は、戦場では上司のそれに違いなく、彼も気を引き締める。

「おい、お前は行かなくて良いのか？」

「僕は二列目。一発目が撃たれたら僕の番だよ」

軍の前線に強力な歴戦の強者達が集まっていくなを眺めながら囁き交わす。様々な順境、逆境を切り抜けて来たA A Aの魔術師達トリプルAが一斉に構える。そこに渦巻く流れは一般兵にですら感じ取れるほどの強力なものである。仮にも魔術師である彼はその力を最大限に感じており、知らずにして戦慄を感じていた。

「レイ、伏せてろ。さすがにこの規模じゃ衝撃も半端ないだろ」
不意に発せられた剣の言葉に軽く頷くレイと呼ばれた青年。

「……………！？　レヴィ……………この感じ……………」

「ああ、間違いない。王国軍にオーバース……………いや、S+は超え

てる。まずいな……………」

レイの言葉に肯定の返事をするレヴィと呼ばれた剣。先程までの落ち着いた様子とは打って変わり、些か危惧を感じさせる口調となっている。

「パティ！ パティ！」レイが軍の先頭に向かって声をかける。そこには軽い鎧を纏い前を見通す少女が立っていた。その少女は振り返ると凜とした言葉を返す。

「ここでは『グランドリオン指揮官』と呼ぶ事になっているはずよ。レイ・グランドリオン君」

その少女はまだ幼さの残る外見とは違い、非常に大人びた態度で応えた。

「そんな事言ってる場合じゃないよ。王国軍にオーバースの魔術師が転送して来たんだ！」

「オーバース？ …………… 私は感じないわよ」レイの言葉に首を傾げるパティと呼ばれた少女。彼女の周囲の魔術師も頷いている。

「間違いないって！ 僕もレーヴァティンも感じてるんだよ！」

「大丈夫よ。オーバースだろうと属性魔術の集中発動には勝てないわ」

レイの警告を軽く流すパティ。レイは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「総員……………詠唱！」

膨大な数の言葉が次々と紡がれ、一種の喧騒となる。意味の分からない者がその言葉を聞いてもそれはただのざわめきに過ぎないが、意味の分かる者が、すなわち魔術師が聞いたのならばこれから起こる事に冷や汗をかかざるを得ないだろう。

「……………レイ！ まずい！ シールドだ！！」突如、^{レヴィ}剣が声を上げる。

「シールド？ まさかこれだけの属性魔術をそれだけで防ぐ気？」

「そのまさかだ。他のカードは使われてない」

レイの言葉に肯定する剣^{レイ}。普通ならばありえないその事態に恐怖までも感じるレイ。

「解き放て！」

パティの声が響き渡り、軍全体に伝わる。それは紛れもなく破壊の前兆に他ならないため、ほとんどの人間が一斉に後方まで退く。

次の瞬間、凝縮された力が見えざる存在^{まほろし}から見え得る存在^{げんじつ}に変換された。具現化された幻想が風、火、水、地、すなわち四大元素へと姿を変えて放たれた。

「もらったわよ！」パティが衝撃を耐えながら前方を見据え、聞こえてくるであろう爆音を待つ。

一秒、期待の眼差しで見つめている。

二秒、立ち上るであろう業火を待ち構える。

三秒、少し長い間に眉を潜める。

四秒、長すぎる間に不安を隠せなくなる。

そして五秒、現れた力に驚愕する。

「ちよつ、な、何なの？　なんで何も起こらないの？　それにこの魔力……………」

「間違いなく精霊魔術だな」

パティの言葉を引き継ぐレーヴァティン。パティ、レーヴァティン、そして、剣を握りしめるレイの全員が前方から発せられる強大

な力を感じとる。まず口を開いたのはレイだった。

「……………パティ、エアーのカード使ってできるだけ大人数で逃げて」
「えっ？」

「早く逃げて！ 僕が負けても大丈夫なように！」

レイがレーヴァティンを構えて腰に右手を当てる。

「何をする気だ、レイ？」

「……………サラマンドラ・ブレイズで対抗する」

「なっ！？」 レイ、正気なの？」

レイの返答に目を見開くパティ。この世界の常識から考えればそれは確かに正気の沙汰とは思えない。

「……………行くぞ、レイ」

しかし、物事には確実に例外が存在する。この場合、例外はレイ、そしてレーヴァティンである。

「頼んだよ、パティ」

そう言い残して走り出す。彼自身が良かれと思う事を成し遂げるために。

「いくよ、レヴィー！」

「いつでもいいぞ」

軍部の最前線まで走り、前方を見据える。渦巻く力はまだ変換されてはいなかった。しかし、それも時間の問題である。

「レイ、時間が無い。もう始めるぞ」

「うん！ 一気に行くよ！！」

少ない言葉で意思を疎通させている。一を聞いて十を知る、とはこの事である。

ダブルマジック

「二重魔術！！」

“ 炎よ、我が心の輝きと共に、サラマンドラ精霊の名の下に、紅蓮の奔流を呼び起こし……………”

レイは眼を閉じ、レーヴァテインの刀身に一枚の紙片^{カード}を当てる。口から紡ぎ出される言葉は普段のそれとは異なっていた。

「レイ！ 来るぞ！！」

膨大な力の解放を感じとったレーヴァテインがレイに忠告する。しかし、実際その必要が無い事はレイもレーヴァテインも承知していた。レイもその発動を確かに感じていたのだから。

“我が前に立つ存在を灼熱の劫火にて薙ぎ払え！”

「行くよ！ …………… サラマンドラ・ブレイズ！！」

サラマンドラ・ブレイズ
【精霊炎】

その言葉は地獄の業火を呼び出す呪文にして、同時に清らかな聖火を生み出す詠唱であった。解放された力は紅蓮の劫火であり、破壊の爆発。

灼熱の爆炎を携え、無を導くその力は、詠唱通りに精霊^{サラマンドラ}の御名のもとにレイの力を糧に成長し、カードの呪縛から解き放たれる。

「こりゃあ…………… マズイ！ ノーマ・アースクエイクだ！」

レーヴァテインが苦しげな声を上げる。向かい来る強大な力を正確に感じ取り、危機感を胸の中に生まれさせる。

「ノーム…………… 地属性か」自らの放った火炎を見守るレイの目にも映った。大地からほとばしる、怒涛の如き岩石の噴出を。

「っ、強すぎるよ！」

「レイ、逃げるぞ！！」

自らの業火の勝つ見込みが零であると判断したレイとレーヴァテインは一瞬で逃げを選択する。

“ 空よ、
……………”

「ダメだ！ 間に合わない！！」レイの詠唱を遮ってレーヴァテイ
ンの悲鳴が響き渡る。

しかし、その悲鳴すらも眩ゆい光に飲み込まれた……………

File・No1「遭遇した強敵」

著者：ユナ・アサクラ

File・I「出現した脅威」

「ヴァレンタイン。準備はできたか？」

「見りゃ分かるだろ。まだだ」

巨大な液晶画面の前で彼が振り返りながらマントを纏う。服はとても軽装であるが、背中には巨大な槍が下がっていて一見しても穏便な用件での準備でない事は分かる。暗く、広い部屋の中において最も武装しているのは彼である。

「まあいい。王国軍の射程範囲にもこちらはまだ入っていない。時間はまだ少しある」偉ぶった初老の男が彼に告げる。

「作戦参謀。作戦はどうなっているのだ？」偉ぶった男よりもさらに偉そうな男が先ほどの男に尋ねる。その男は広い部屋の中で最も高い位置に椅子を構えていて、液晶画面を眺めながらあれこれと考えている。

「ヴァレンタインが王国軍の魔術を防ぎ、精霊魔術を一撃叩き込みます。その後一気に一般兵が攻め入ります。そうすれば最も近いビスタの街を攻め落とせます、国王」作戦参謀が高座の男に答える。「またまた人任せな作戦なこと」ヴァレンタインと呼ばれた男がため息交じりに答える。

「……………的確かつ確実な作戦」

今まで彼の隣にいなから一言も喋らず、微動だにしていなかった少女が口を開いた。

「うるせえよ。俺がいないと勝てないのかよ」彼は完全に呆れて言う。

「お喋りはもういい。ヴァレンタイン、行け。敵の射程にもう入るぞ」国王の厳かな命令が下された。その命令に逆らえるのはこの王国にはおらず、逆らおうとする人間もまた、この国にはいなかった。「じゃ、行つてくらあ。レミイ、こっちは任せたぞ」

「……………気をつけて」レミイと呼ばれた少女が軽く頷いた。

“空よ、我が存在をその流れに委ね転移させよ！”

彼は腰の入れ物から一枚の紙片を取り出しながら、ゲンゲニル壊滅の神槍を構える。

「……………エア―！！」

エア―
【空】

不可視の力の流れに彼は身を任せる。その流れは一陣の風となり、その風は場所と場所を繋ぐ扉となり、彼の存在を運ぶ。

く
とある平原く

「ヴァレンティンさん！！　もう魔術師が詠唱準備に入っています
！！」

「……………だから、うつせんだよ！！」

風の隙間から現れた瞬間、耳元に爆音が叩き込まれた。彼は獣でも化け物でもない。人である以上、耳に直接大声を叩き込まれたら当然頭に相当なダメージが送られる。

「ですが！　この力は間違いなく属性魔術です！！」

「だあかあああ！　黙って見てりやいいんだよ！！」怒鳴って言い返す。その怒鳴り声は一般兵にとっては上官のそれであり、歯向かったら下手したら首が飛んでしまうのだ。彼はそんな人間ではないのだが、兵を黙らせる力を十分に持っている。

「は、ハイイ！！」一般兵は一言だけ返すと頭を下げる。

「……………来たな」彼は腰から紙片を取り出す。

「こ、この規模は……二十発は超えてますよ!!」
「だから、黙って見とけつつつてんだよ!!」彼は眼を閉じて槍を構えた。

“我を縛る全因果を跳ねのけ、神秘の加護をもたらせ!”

彼の周囲に神秘の力が流れ、そこに万物を否定する強固な守りをもたらす。

「……………シールド!!」

【盾】
シールド

「で、ですが……………」兵は口出ししようとしたが、彼に睨まれて口を閉じる。彼が大丈夫と言う時は大丈夫なのである。例え、シールド一枚だろうと全て防いでくれる、そう信じる事にした兵であった。
「来な……………止めてやるぜ!」彼は手を不可視の壁に沿え、来たる魔術の大群に供える。

次の瞬間、彼らの視界に強烈な光の山が現れた。それは疾風、業火、激流、岩石が徒党を組んで彼らを焼き、潰し、砕き、消し去ろうとしている。

「ウィンド、ファイア、アクア、アース……………」たったこの規模の軍相手に大げさだな」彼は苦笑するとグングニルで自らの体を支える。あくまで気休めであり、そんな事をせずとも大丈夫だと彼は絶対の自信を持っていた。

光が炸裂した。四元素の山が、彼の張るシールドに衝突し強烈な相反の力がはたらく。その元素の山の力は通常ならば阻む事は不可能なほど大きさである。しかし、彼はそれをシールド一枚、片腕一本で食いとめている。

「……………っ!」彼は力を僅かに入れる。その途端、全てのエレメン

トが霧散し、消え去った。

「す、凄い……………」一般兵は感嘆の呟きを漏らした。

そして、彼は腰から紙片を取り出す。『地』と書かれ、多彩な色彩で描かれた様々な文様は瓜二つのものであった。

「さて……………もう終わらせるか」彼は強烈な力を展開させる。その力はもはや人の理解の範疇を軽く超越するものであり、その強大さに一般兵は思わず一步後ずさっていた。

“地よ、全ての想いを精霊、ノームの名の下に集わせ、万物を打ち砕く大地の怒濤を！”

その言の葉に秘められた不可解な力、力と言葉の織り合わされた耽美な響きは人の理解の範疇を軽く超越している。その響きはカードを通り、大地の怒りへと変換される。

「いくぞ、ノームの力を見せてやれ！ ノーマ・アースクエイク！
！」

ノーマ・アースクエイク

【精霊地】

膨大な力が圧縮され、折りたたまれ、そして展開される。力の波動は空間そのものを歪ませるほど強大なものであり、歪みを生みだし因果に断絶をもたらす。

「はああっ！！」彼の一声と共に、大地の怒濤が音を立てて一直線に放たれる。

その瞬間、一つの痛みが彼の胸をよぎる。

「くっ……………」忌々しげに呟くとその痛みを無視する。

地の怒濤はもの凄い速さで皇国軍に迫っていく。もはやその力の流れを止める事ができるのは彼しかないはずであった。

「つつ！！？」彼は驚愕の声を隠さずに上げた。

彼は敏感に感じ取った。強大な、自らの魔力に対抗できるだけの力の発現を感じ取った。

「まさかっ!？」力の響きが一瞬で彼の元へと届く。

力の波紋は波打ち、彼が今まで出会った事、見た事も無いほどの力を秘めていた。

「俺の魔術が!？」何が起こりうるのか、今、何が起ころうとしているのか彼は完全に理解していた。

よって、恐怖した。自らを打ち破るやもしれぬ力の到来に。

「破られる、だと!？」自らの放った魔術がその瞬間、初めて敗北の二文字を見る事になった事を知った。

彼が強者故にそこで決めた。初の逃亡を決める事を。

「……………エアーを使え!」彼は大音声で支持を出した。

彼が兵の頭である以上、その命は可能な限り救わなければならない。
い。

「早く! 魔術師はエアーで退却だ! 急げ!!」支持を繰り返す。
始め、支持を理解できなかった魔術師達は即座に指示に従い始めた。姿が次々と消えていく。

彼はここで一旦、無駄なプライドを全て捨てた。ここでそのプライドを捨てられるが故の強者であり、彼も紙片を一枚取り出した。
「……………仕方ねえ。くっ……………逃げるしか……………」彼は忌々しげに
呟いた。

“ 空よ、我が存在をその流れに委ね転移させよ!”

「……………エア―！！」力を展開し、彼は自らとその周囲の人間を包み込んだ。

エア―
【空】

一瞬の風が吹き、彼とその周囲の人間を巻き込み、力の狭間へとねじ込んだ。空間の歪みを利用し、存在そのものを別座標へと転移させた。

そこに残ったのは、運びきれなかった人間と、雪崩のように訪れた膨大な魔力だけであった。

File・I「初めての脅威」

著者：ユナ・アサクラ

File・I「出現した脅威」（後書き）

どうも、かなり久しぶりになってしまいました。申し訳ありません。最近では小説の執筆を手掛けるのが珍しいくらい忙しい毎日です。

今回も二話同時投稿です。まあ、キングダム ーツCOMのソ編とり 編を同時にプレイしてる感じでしょうか？ ……はい、訳分かります。

次回がいつになるかはわかりませんが、楽しみにしていただいたら幸いです。感想もいただけたら嬉しいです。

File・II「異能の力」

（医務室）

「うう……………く……………ああ！」

そこは清潔なイメージを受ける白を基調とした大部屋であった。わずかながら、消毒薬の独特な香りや殺菌するための薬品の匂いが立ち込めている。

「ん……………あう……………んんっ」

並べられたベッドにかけられたシーツは清潔そのもので、負傷者を受け入れる準備はいくらでもできていた。隣の部屋では医療担当者交代制で常に対機。何の問題も無い完璧な設備だ。

「……………く、あああ！……………んん、うう」

しかし、珍しい事にこの時に広い医務室にいた人間は二人だけであった。人ならざる存在をも含めれば二人と一振であるが、この際、そんな事は些細な問題に過ぎなかった。

「……………お兄ちゃん！ お兄ちゃん！」

そんながら空きの医務室に声が響き渡っている。その声は当然そこにいる人間の発するものであり、男声女声一つずつであった。

「……………うう、んん……………ああああああ！！！」

「どうしました!？」

男の咆哮、もとい悲鳴を聞き取った恰幅のよい看護婦が慌てて医務室内に入ってきた。そこで看護婦が眼にした光景は……………

「あつ、すみません。彼がうなされて大声を出してしまつて」

皇国軍特級魔術師にして大尉魔術師であるパトリシア・グランドリオンが、汗だくになり目を見開いている男の肩を押さえていた。

男は大地震に飲み込まれる悪夢から既に解放されていた。

「無理もないわねえ。エドワード・ヴァレンタインの精霊魔術を真っ正面から受けたんですものねえ」

「私も驚きましたよ。本当に生きててよかったです」

看護婦の言葉にしみじみと頷くパトリシア。その瞳には深い慈愛が刻み込まれていた。

「ハアハア……………ぱ、パティ……………ここは？」ようやく落ち着いた男が胸を押さえながら隣の少女に尋ねる。

「皇国軍本部の医務室。お兄ちゃん、丸一日寝込んだのよ」

「丸一日……………そうか。僕はノーマ・アースクエイクに押し負けて……………」

頭を軽く押さえ、うつすらと残る曖昧な記憶を辿りながらレイ・ブランドリオンは呟く。

「やっぱり分かってねえか」

その時、その場にいる誰のものでもない声が響き渡った。その声はそこにある一振の剣から発せられていた。

「分かってない、って何の事？」レイは、自らの武器にして大切な相棒、封印の魔剣・レーヴァテインに尋ねる。

「それは、私達から説明しよう」

突然、扉が静かに開き、一人の初老の男性が入って来た。その姿を眼から取り込み、それが誰かを認識するのに幾刹那。次の瞬間にはレイとパトリシアは眼を大きく見開いて頭を下げた。

「こ、ここ、皇帝!？」

「何故このような所に!？」

その男は皇帝、リオファネス・オルディランその人であり、レイとパトリシアにとっては自分の国の元首である。

「頭を上げてくれ。君達の事はよく聞いているよ」

長い時の流れと幾度もの戦闘の中で研摩された穏やか、かつ荘厳な物腰で二人に告げる。

「私達の事を、ですか？ 一体誰に……？」パトリシアは至極不思議そうな表情を浮かべる。

「……ジイちゃ、じゃなくて、祖父からですか？」

「そんなに固くならんでも良い。楽にしたまえ。……そう、我が戦友、ルーファウスに聞いたのだ」

緊張気味なレイとパトリシアに微笑みながら答えるリオファネス。その落ち着いた声は二人に安心感をもたらした。

「優秀な孫二人をよろしく、とな」

「そ、そんな優秀だなんて。私達はあくまで一般魔術師です」

「僕なんかBBランク+ごときですし」

驚いて眼を開く二人。同じグランドリオンの血を引く従兄妹の反応は非常に似ていた。

同じグランドリオンの姓を持ち、お兄ちゃんと呼びつ呼ばれつする関係であるレイとパトリシアが赤の他人であるはずもない。二人は従兄妹であり、レイは十八歳、パトリシアは十五歳であるため、レイはパトリシアの兄のような存在である。ただ、戦場ではパトリシアが先輩であり、レイはパトリシアの部下である。

二人は戦争で幼い頃に両親を失っており、そんな二人を育てたのが祖父であり、皇国軍最強と讃えられた魔術師、ルーファウス・グランドリオンであった。

「いや……君が秘めた力はオーバーSランク、いやいや最低SSには値する」

一人分、新たに声加わった。ちょうど医務室に入り、リオファネスの後ろに立ったところであった。

「ツ、ツカサさん！？ な、何故あなたまでここへ？」もはや驚愕故に失神しそうなパトリシア。

彼女の眼に映っていたのは、彼女の上官にして皇国軍を率いる大魔術師、ツカサ・オルディランであった。この皇国軍の将軍であり、SS+ものランクを持つ強力な魔術師だ。

ちなみに、魔術師のランクは戦闘技術と発動可能な魔術によって決められる魔術師の保有能力を表す数値である。

C〈A、そしてSまであり、CとBはCCとBB、AとSはAAとSSSまである。また、全ランクには+ランクもあり、最低Cから最高SSS+の二十段階に分けられる。もつとも、C代の人間は魔術師として全く使えないため魔術師にはなろうとはせず、SSS+に至ってはそのランクを得た魔術師は一人もいなかった。実質、魔術師とはB〈SSの範囲の人間である。

漆黒の髪を揺らしながら戦友であるパトリシアに微笑みかけた。

「君の強力な従兄を見に来たんだよ、パトリシアさん。エドワード・ヴァレンタインの精霊魔術を相殺させるほどのね、レイ・グランドリオン君」

ツカサはレイを見ながら優しく言う。

「相殺？ 僕のサラマンドラ・ブレイズは押し負けたはずじゃ」レイは自分の現状を考えながら呟く。もし、自らの魔術が負けていないのならば 医務室の厄介になる事などないと考える。

「負けた、と言うのはあながち間違いではないよ。ただ、それだと『勝ち』がいなくなるだけだ」ツカサは三枚の紙片を懐から取り出し、レイに見せる。

「カードだ……」それを見たパトリシアが声を上げる。

「そう、君達もよく知る『魔術カード』。これについて、簡単に説明してくれないかな？」ツカサが三枚のカードをパトリシアに見せた。

カードには円が描かれ、常人には理解すら不可能な力を秘めた文字、ルーンがちりばめられている。直線、曲線、記号、文字は様々な紋様を生みだし、カードはさながら一つのキャンパスと化している。三枚それぞれには異なる紋様が刻まれ、中心に『風』『炎』『水』と書かれている。

「魔術カードは、予めカードそのものに膨大な魔力を封印し、術者の魔術発動を補佐する宝具です」

パトリシアは『何故、今更そんな事をきくのか？』と些か疑問を感じながらもツカサの指示に従う。

「カードそのものが生きた魔力を持ったため、使用しても時間回復します。カードは全体で大きく『陽』と『陰』に分けられ、互いに相対する力を秘めています」

ツカサが示し、パトリシアが説明したもの。それこそが、レイ達魔術師を魔術師たらしめている宝具である。彼ら魔術師は魔術カードを媒介とし、秘められた魔力を解放することで異能の力を奮うのだ。

「そこはレイ君も知ってるね？」

パトリシアの言葉が終わるのと同時にツカサが尋ねる。

「はい。基礎は覚えています」レイは小さく頷く。彼もまた魔術師として軍に属するため、基礎知識はキチンと身につけている。

「じゃあ、同威力の魔術が真つ向からぶつかったらどうなるか知ってるかい？」レイの返答に微笑みながら改めて尋ねるツカサ。

「えっ……………」レイは返答に詰まる。まだ教わったことのないため当然である。

「場合により、二種類の反応が起こるんだ。すなわち、反発と中和。カードの持つ陰陽が同じ時は反発反応である『魔力暴発』、違う時は中和反応である『魔力相殺』が起こるんだ」

ツカサはかい摘まんで説明した。この反応はいわば磁石と同じである。極が一致すれば磁力は反発し、相反すれば引き付けあう。

「僕のサラマンドラ・ブレイズに、ノーマ・アースクエイクがぶつかった。だから……………」

「同じ陽どうし。起きたのは魔力暴発よ」レイの言葉をパトリシアは引き継いだ。

「魔力暴発が起きたらどうなるの？」レイはパトリシアに尋ねる。
今、一番大事なのはそれである。

「反発した魔力は互いに共鳴し、威力を削りながら術者のもとに跳ね返る。つまり、サラマンドラ・ブレイズの分の力はレイ君に、ノーマ・アースクエイクはエドワード・ヴァレンタインのもとに弾き返されたんだ」

「エドワード・ヴァレンタイン……その人があの魔術を……」

レイはツカサの言葉を受けて呟く。エドワード・ヴァレンタインがSSSランクの王国だけでなく世界的にも最強の魔術師である事はレイも知っていた。

「……ん？ 魔力暴発で反発した魔力はどうなったんですか？」
レイはふと気付いた。

自分に身体的な外傷は全く見られない。レイが気絶したのはあくまで魔力の使いすぎである。つまり放たれた魔力はレイの限界に近い量。レイにはそれだけの魔力が霧散するとは到底思えなかった。

「……魔力暴発で弾かれた魔力が術者にダメージを与える事はない。だけど、その周りの人間なら話は別なんだ」ツカサは遠回しに言う。

「術者を避けた魔力はその場にあるものを全て薙ぎ払う。それが魔力暴発なの」パトリシアはツカサの言葉をやや補う。

レイは既に察していた。自分の魔力が何をもたらしたのか。

「つまり……僕のせいで何人も死んでしまっただんですね」行き場を見失ったサラマンドラ・ブレイズの魔力はその場にある全てのものを薙ぎ払い、そして消え去った。レイの跳ね返された魔力は周囲の人間の命を一瞬で奪ったのだ。

「それは違う」ツカサはキツバリと言い切った。レイはゆっくりと顔を上げる。

「むしろレイ君のお陰で被害は桁違いに縮小されたんだよ。パトリシア君にエアーのカードを使わせて、多くの人を避難させた」

ツカサは『空』と書かれたカードを見せる。空間を操作する力を

秘めたそのカードは、人を瞬間移動させたりする力を持つ。

「そして、ノーマ・アースクエイクを反発させて魔力を大きく削った。こちらが受けたダメージは本来受けるはずだった十分の一も無い上、王国側にこちら以上の損害を与えた」リオファネスが続ける。サラマンドラ・ブレイズとノーマ・アースクエイクが反発した以上、敵側にも同等の魔力が跳ね返ったはずなのだ。

「はあ……………」レイは小さく答えた。

レイは些か煮え切らない想いだった。咄嗟の事だったとはいえ、自らの放った魔術が人の命を多く奪った。戦争とはいえ、レイはまだその感覚に慣れていなかった。

「レイ君が気に病む必要は無い。確かに君の魔術は多少の命を奪った。だけど、その何倍もの命を君は救ったんだから」

意気消沈しているレイにツカサは優しく告げる。その言葉でレイは幾分かの元気を取り戻した。

「はい。ありがとうございます」

「……………君はルーファウス君によく似ているな」突如、リオファネスがレイに言う。

「僕が……………祖父にですか？」レイは首を傾げる。今までそのように言われた事はなかった。

「ああ。よく、似ている」何かを思い出すようにリオファネスは優しく呟いた。

レイは色々な事に気を取られまだ気付いていなかった。自分が先の戦闘でどれほどの事をしたのかを。そして、それが自分に何をもたらすのかを……………

No.2 「異能の力」

著者：ユナ・アサクラ

File・II「奇怪な令」

〔戦技訓練所〕

「くそっ!!」風を斬る音と共に神速の槍が放たれる。魔力の生み出した訓練用のターゲットは木っ端微塵に砕け散る。

“雷よ、その光の刃で全ての罪を薙ぎ払え!”

手の槍に一枚の魔術カードを沿えながらかなりの速さで詠唱する。
「轟け!サンダー!!!」
彼の声と共に魔力が溢れ出し、カードを通して世界へと具現化する。

サンダー
【雷】

閃光が炸裂し、剛雷がターゲットに叩き込まれる。強烈な電圧はその物体を一瞬で爆砕し、溢れ出た電流は辺りに放電する。落雷の衝撃波は周囲のターゲットを根こそぎにし、吹き飛ばす。

「ハアハアハア……」強烈な魔術を使ったのにも関わらず、彼の身体の内外に大きな変化は見られない。その魔力、体力、そして胸にこべりつく苛立ち。

「何だ! 誰なんだ! 俺の前に立ち塞がるのは!!」

先の戦闘にてノーマ・アースクエイクが魔力暴発で跳ね返されてから既に三日が経っていた。しかし、エドワード・ヴァレンタインの苛立ちが消えることはなかった。

「くそっ! 俺が今まで積み重ねてきたのは何だったんだ!」

「エド……」そんな彼に落ち着いた声がかけられる。

「レミイ、止めんなよ……」エドワードは訓練所の入口に寄り掛かるレミリア・オルザナドゥに告げる。

「……無意味」レミリアはただそれだけを言う。

戦技無双、『白銀の戦闘師』と言われたエドワードにとって、こんな訓練は確かに全くの無意味。むしろ魔力を消費する点から悪影響しか与えていない。

「俺だって……こんな事しても意味ねえのは分ってるさ」

だが、雷を走らせ、風で薙ぎ払い、冷気で凍てつかせ、岩で打ち砕く……そういった事はエドワードの苛立ちを幾分かは無くしてくれた。

「けどよ、こうでもしないと暴れちまいそうだ」最強と言われたエドワードにとって、自らの魔術、それも最高レベルの精霊魔術が魔力暴発で跳ね返されるなどあつてはならないのだ。

「……… 事実^①は事実」対するレミリアは淡々と告げる。長年の付き合いから、レミリアはエドワードのプライドの高さを知っている。

自らの魔術の鍛練に関しては人一倍努力をしていたエドワードは、いつしか自分の魔術に絶対の自信を持つようになっていた。彼がSSランクに上がってから彼の魔術に対抗出来た者は一人もいない。その事もあり、今回の件はショックが大きかったのだ。

「……… 分かったよ、止めりゃいいんだろ」エドワードは手に持つ壊滅の神槍を床に突き刺すとレミリアに向き合う。

「んで？ わざわざここに呼びに来た理由は何だ？」

「……… 国王が呼んでる」

エドワードは、レミリアが何かをしている自分に声をかけるのは何か用がある時だけだと知っていた。

「クソジジイが。何考えてやがる」些か以上に無礼な発言だが、いつもの事なのでエドワードもレミリアも気にしなかった。

「国王の間」

「ヴァレンタインよ、気を鎮めよ」エドワードが国王、ブライト・グレンダインの前に立った途端に言われる。

『開口一番それかよ』心の中で忌ま忌ましげに呟く。こんな時、このお節介なブライトを厄介に感じるエドワードであった。

「別に気が立つてる訳じゃねえよ」

不快感を隠しもせずに返答する。もし、一般兵ごときがこんな態度をとれば、無礼千万で即退出させられるだろう。

「……………まあ、よい。して、わざわざ呼んだのはお前に使いを頼みたいからだ」ブライトはため息混じりに続ける。手には手紙を持っている。

「んなもん、別の奴に行かせりやいいだろ」エドワードはかつたるそつに答えた。つまりは、エドワードに使者になれと言うのだ。少なくとも、国軍最強と言われる魔術師に与える仕事ではない。

「相手は、エーリン・ラグラドルだ。お前でないと相手ができない」ブライトは肩を竦めながら告げる。

「エーリンかよ。……………面倒だな」エドワードは古い戦友の事を考えながら呟く。

『確かに、あれの相手は俺かレミイにしかできないな』

「じゃあねえな……………行きやあいんだろ」エドワードはエアールのカードを取り出すと国王から手紙を受け取った。

“風よ、我が存在をその流れに委ね転移させよ！”

カードに魔力を込めながら詠唱し、空の力を秘めたものに変換していく。

「行くぜ……………エアー！」

【空^{エア}】

使い慣れたカードの魔力に包まれながら、エドワードは座標転移の魔術を発動させた。

く王国軍西方基地く

エドワードが到着しても、珍しいことになんの大声も放たれなかった。

「また人払いしてんのか」エドワードは呆れたように呟く。

エドワードの友人、エーリン・ラグラドルは本人はうるさいが周囲が騒がしいのを嫌う奇抜な人間であった。そのため、今現在エドワードの周りには人っ子一人もおらず、シンとしていた。

エドワードはエーリンのいる（はずである）西方基地隊長室前に着くなり大声で言った。

「おい！ エーリン、開ける！」

「……………」

沈黙。エドワードの声は反響し、廊下にワンワンと響いた。

「……………いるのは分かってんだ。後三秒で開けなかったら扉を破壊するぞ。……………」一方的に要求を突き付けるエドワード。

次の瞬間、部屋の中が急に騒がしくなり、バタバタいいだした。

「……………」ゆっくりとカウントする。腰に提げたカード容れから一枚取り出し構える。

その間も部屋の中はバタバタいい、更にバタバタが近づいてくる。

「さ……………」

「ち、ちよつと待った！」エドワードが『三』と言い終える前に扉は音を立てて開いた。

「捕らえよ、チエイン」唐突に別の言葉を発するエドワード。

チエイン
【鎖】

構えたカード、チエインを通した魔力は鋼の鎖と姿を変えて、エドワードの目の前の女を縛り上げた。

「ち、ちよつとタンマ！ 無声詠唱なんて卑怯よ！！」鎖に縛られ動きを封じられた女は声を張り上げる。

「うるせえよ。だったら出会い頭に逃げるような真似はもうしない事だな、エーリン」エドワードは自らの仕留めた獲物、もとい訪問の対象であるエーリン・ラグラドルを眺めながら言う。

「逃げないよ。ただ、アンタがわざわざアタイに会いに来るなんてどうせ面倒な仕事なんだろう？」

些か異常なテンションでエドワードにまくし立てるエーリン。しかし、これが彼女の素の姿なのだ。昔からの付き合いであるエドワードは『アタイ』という一人称にも、奇妙なテンションにも慣れていた。

「知るか。ジジイ直々に渡されたしな」エドワードは懷から手紙を取り出す。

「アンタは戦友がどんな仕事する事になるのか、とか聞こうと思わなかったのかい？」つまらなそうにエーリンは手紙を受け取り、封を切る。

「……………」
「……………」

エーリンの視線が手紙の下へ行けば行くほど、眉は寄りしかめっ

つらへと変わっていく。

「そんなに面白い内容だったか？」エーリンの眼が手紙から離れたところで尋ねた。

「意味分かんない。なんでブライトさんはんな命令を……………」エーリンは呆然としながら呟く。

「……………」？ 何を書いてあったんだよ？」エーリンの不可解な反応にエドワードまでが眉をひそめる。エーリンは黙って手紙をエドワードに渡した。

〃〃 西方基地隊長エーリン・ラグラドル

（前略）

汝にイルムドア山に住み処を設けるドラゴンの討伐を命ずる。
なお、エドワード・ヴァレンティンを必要に応じて同行させることを許可する。

（後略）

ブライト・グレンダイン 〃〃

手紙にはそう書かれていた。ちなみに、略の部分はいろいろと面倒な事が書かれている。エドワードはその全てを流し読みしていた。「……………」あのクソジジイは何考えてやがる「エドワードは完全に呆れて呟く。

その命令が今でなければ二人とも納得できた。しかし、今は戦時である。龍との戦いで命を落としても不思議はないにも関わらず、何故このような命令をだすのか。それが解せない二人であった。

「俺らで軽くいなせるような雑魚だったらわざわざ俺達に行かせないしな」エドワードは考察を始める。王国でも屈指の魔術師と言われる二人に討伐の命を出すという事は相当な強敵であるはずである。そんな相手をわざわざ戦時にやらせるのか全く分からなかった。

「任務期間は一週間。山は王国と皇国の境。しかも龍は十中八九強敵、と」

「ついにボケたか？」エーリンは肩を竦める。

「任務開始は一週間後、これから洞窟までは一飛び。場所は……」

「ヒラリー平原のすぐ近く、か」読み上げるエドワードに続ける。

「案外アンタと引き分けた魔術師とバツタリ遭遇するかも」エーリンは笑いながら言う。その言葉に、ピクリとエドワードが反応する。

「そうになったら、そうなった時さ。そう簡単にやられはしない」目を閉じながら力強く言う。他でもない自分自身に。

「ほーほー、頼もしいな。じゃ、アタイは観戦といきますか」エーリンは軽く笑った。

そして、エドワードと引き分けた相手に会ってみたいと思った。

王国最強の魔術師で冷静沈着、泣く子も黙る白銀の戦闘師。そんな彼をここまで熱くさせた魔術師を見てみたいと。

File・II「奇怪な令」

著者：ユナ・アサクラ

File・II「奇怪な令」（後書き）

間が空きましたがFile・IIです。とりあえず、次回に主要キャラの説明を入れるつもりです。まだ世界観とかキャラ設定とか曖昧なままですがそこできいろと説明するつもりです。

更新は相変わらず遅いですができるだけ早くやれるようにしますので、今後も応援よろしくお願いします。

感想や評価也大募集です！

File・III「模擬戦闘」

（皇国軍・一般寮）

医務室の薬の匂いから解放されたレイ・クランドリオンは、寮の自分のベッドに寝転がっていた。もともと、魔力の莫大消費により入院していたため、目覚めてすぐに帰る事ができた。

「……………ねえ、レヴィ」レイは自らの剣を愛称で呼ぶ。レーヴァテインの名前が長いという事で付けた名であった。

「なんだー？」気の抜けたような返事が返ってくる。レーヴァテインはレーヴァテインでレイが眠っていた間は相当暇だった訳であり、やる気がそげ落ちていた。

「僕の魔力って、皇帝とかツカサ將軍が言う程強いもんなの？ パティはそんな感じじゃなかったけど」医務室での会話を思い出しながら尋ねる。

「……………ああ、そうだ。じゃなけりゃ、俺にかけられた封印を解いて契約なんかできしねえ」レーヴァテインは素直に答える。しかし、些か口調が重くなっている。

「なんで、今まで黙ってたの？」レイは率直に疑問を口にする。

「……………お前がそれだけの力を持つてるって知られたら間違いなく利用されるからな。俺の存在込みで」苦々しげに呟くレーヴァティン。と言っても、顔がある訳ではなく、声に表れているだけだ。

「まあ、そうかもただけさ」レイは静かに頷いた。レーヴァテインが自らを心配してくれるのに嬉しさを感じていた。

「最初に言っただろ。『力に溺れるな、自分を常に見続ける』って」レーヴァティンはレイと契約した時を思い出しながら言う。

二ヶ月前

「俺は封印の魔剣・レーヴァテイン。よろしくな、レイ」契約を終え、改めて挨拶するレーヴァテイン。

「……………」レイは手に持つ質素な剣を眺める。柄から長い絹が伸びているだけで何の変哲も無い片手剣だった。

「ん？ どうした？」レイは何の返答も返さない。

「……………」えっと、それがレーヴァテインの素なの？」

「どうゆーこっちゃ？」レイの言葉が理解できないレーヴァテイン。

「いや、だからさ、さっきの契約の時と大分感じがたがうな、って」

レイは小さく言う。レイとしては『封印の魔剣』なんて仰々しい名前のついた剣であるため、もっと堅苦しいのかと思っていた

「ああ、ありやあただの形式的な台詞だ。元々、俺は堅苦しいの苦手だしな」

「……………」

あまりに軽いレーヴァテインの言葉に些か気が抜ける。契約の詞^{ことば}はまるで、天壤から響く神の声の如き威厳をもっていた。

「……………」だけどな」唐突にレーヴァテインが言葉を発する。

「……………」？」レイは何となく背筋を伸ばす。今の言葉は今までと違い、重みが込められていた。

「……………」レイ、お前は力を手に入れた。だけどな、力に溺れるな。自分を常に見続ける」

「……………」うん」レイは静かに頷いた。その眼には確かな光が宿っていた。

二ヶ月後（現在）

「うん、そんな事、確かに言われたね」レイも二ヶ月前の記憶を掘り起こしながら肯首する。

「いつかはこうなるって分かってたさ。だが、俺はお前が戦争とはいえ、殺人のために利用されるのが嫌なんだ」レーヴァテインは重々しく呟く。そこには嘘も偽りも無い事をレイは感じていた。

「……………」ありがとね、レーヴァテイン。心配してくれて」レイは自然にその言葉を使っていた。

「……………」お前のジイさんにもそう言われたな」レーヴァテインは懐かしそうに呟いた。

「えっ？ 僕のジイちゃんに？」

「ああ、ルーファウスにこんな感じの話をした時も言われたな」レイの驚いたような言葉を肯定する。

「まあ、相棒の事を気にかけるのは当然だ。気にすんな」レーヴァテインはぶっきらぼうに言う。

レイが何と返そうか考えていると部屋の戸が叩かれる。ノックの音が部屋の中に響き渡った。

「開いてますよ」レイはレーヴァテインを置いて扉を見つめる。

「お兄ちゃん……………」今、暇？」扉が開かれパトリシアが入ってくる。「パティ、どうしたの？」レイはベッドから降りる。

「あ、別に私に用があるんじゃないくて、ツカサさんがお兄ちゃんの事呼んで来てって頼まれただけだから」パティは付け加えるように言った。

「ツカサさんが？ ありがと、パティ」レイはレーヴァテインを鞘に納めて背中に吊す。

「戦技訓練所で待ってるらしいわ」パトリシアは机へ手を伸ばすレイに言う。

「うん。分かったよ」レイは使う事ができる魔術カードを腰のカードケースにしまい、扉に向かう。いかなる時、誰に呼ばれた場合であろうと、装備を整えるのは常識であった。

「お兄ちゃん……気を付けてよ」パトリシアはすれ違い際にそう告げた。

〔戦技訓練所〕

レイが戦技訓練所に着いた時には、ツカサは既にそこで待っていた。呼び出したのはツカサなのであるから当然と言えば当然である。「ツカサさん、お待たせしました」レイは頭を下げながら訓練所に入る。

「やあ、レイ君。呼び出したりしてすまないね」ツカサは優しく微笑みレイに向き合った。

ツカサの横では刀身十センチほどの大剣が深々と床に突き刺さっていた。レイは、ツカサが凄腕の大剣使いだと思い出していた。

「それで、僕に用って何でしょうか？」レイは微笑みを崩さないツカサに尋ねる。

「父上……つまり皇帝と君のお祖父さん、ルーファウスさんに頼まれたんだ」ツカサは優しい口調でレイに言う。

「君を……育て上げ、強さを身につけるように、ね」

一瞬、かなりの量の思考がレイの頭を支配した。まず、ツカサが皇帝の息子である事を思い出した。次に、ルーファウスが皇帝やツカサの友人だと言っていた事が頭を過ぎった。そして、自分を鍛えるとはどういう事なのか、と考えが至った。

「えっ………？」ようやく搾り出した言葉はそれだった。

「簡単に言うなら、私が君の戦技教官を担当するって事だよ」

レイは訳が分からなかった。レイ自身の魔術師ランクはBB+であり、まだAランクですらない。そんな自分に何故SS+のツカサを戦技教官としてつけるのか。

「で、ですが！ 僕はまだAランクにも満たない中級魔術師です！」
「言つたろう。君はオーバースほどの能力、実力を持っていると。
でなければエドワード・ヴァレンタインの精霊魔術を跳ね返すなんて不可能なんだから」レイの反論を全く受け付けないツカサ。

「それは……………きつと何かの間違いです」レイは驚きと混乱から弱々しく呟く。

「……………なら、試してみるかい？」

「えっ？」ツカサの言葉がまた一瞬理解できなかった。

「私が君と手合わせする。ただし、本気でだよ。レイ君が一撃でも私に通す事ができたら君は本物だ」ツカサは大剣に手をかけながら言う。その目には嘘も冗談も無かった。

「……………分かりました」レイは、ツカサが始めからそのつもりだった事に気付いていた。わざわざ戦技訓練所に呼び出した理由がそれであると。

「君が勝つたら訓練を受けてもらうよ。負けたら好きにしている。レーヴァテイン、君は口出し無用だよ」ツカサは大剣を引き抜きながら言った。レイが力を抜く可能性など微塵も無いと考えているようだった。

「ああ。俺もレイも本気で行くさ」レイの手の中でレーヴァテインが告げる。

「じゃあ……………開始！」ツカサは大剣を引きずるように構える。

「行くよ、レイヴィ！」レイは軽くレーヴァテインを握る。

「はあっ！」レイは軽い構えでツカサに切り掛かる。鋭い横薙ぎの剣戟はいともたやすくツカサに止められる。

“雷よ、その輝ける刃を轟かせよ！”
いかすち

腰からカードを一枚引き抜き、高速で詠唱する。その隙にツカサはレイから間合いをとる。

「薙ぎ払え、サンダー！」レイの声と共にカードを通った魔力は轟く雷鳴へと姿を変える。

サンダー
【雷】

眩しい閃光が走り、高電圧の塊が一瞬でツカサに迫る。

「……………はっ！」ツカサは体重を巧みに移動させ、大剣を薙ぐ。運動エネルギーを秘めた大剣は稲妻にぶつかりと一瞬で霧散させた。

「えっ!？」レイは驚いて間合いを確保する。何の反応もなく、魔術を一瞬で消し去ったのに驚きを隠せなかった。

「今度は、こっちから行くよ」ツカサは懷からカードを取り出す。

“樹^きよ、汝の身体を戒めの鎖とせよ!”

「捕らえよ、ウッド!」ツカサの魔術が発動し、展開していた魔力が変換される。

ウッド
【樹】

おい茂る頑丈な蔦があらわれ、レイを縛り上げようと一瞬で迫る。

『剣だと斬る前に搦め捕られるな』レイは自然に的確な判断をしてカードを引き抜く。

“炎よ、汝の姿はわが心。我が前に紅蓮の広がりと呼び起こせ!”

レイは声を出さずに心中で詠唱する。すなわち詠唱無用の『無声詠唱』である。

「いけっ、ファイア!」

ファイア
【炎】

刹那、レーヴァティンを媒介に紅蓮の魔術を発動させる。カードから広がった業火が蔦に絡み付き、一瞬で消し炭に変化させる。

「四属性魔術を無声詠唱!?」ツカサは驚愕を隠し切れなかった。そして確信した。レイの力が本物であると。

「はあ!」レイはレーヴァティンを深く構えるとカードを二枚添える。

ダブルマジック

「二重魔術!!」魔力を展開し、レーヴァティンで誘導して魔術を発動させる。

“水よ、我が心の煌きと共に、ウエンディーネ精霊の名の下に、生命の清流を溢れ出させ……………”

莫大な魔力が展開されカードを通り変換されていく。

「まずい、ね。レイ君本気だ」ツカサは軽く微笑むとカードを構える。

ダブルマジック

「二重魔術……………」

“炎よ、その輝きは精霊サラマンダーの御下にある。神の如きその輝きをもって、森羅万象を焼き尽くせ!”

“その清き流れで万物を葬り去れ!”

ありえないほどの力を秘めた二つの詠唱がこだまする。レイが先に詠んでいた分に追い付くため、ツカサは失敗のリスクを負いつつも早口で詠唱した。

「砕いて! ウエンディーヌ・スプラッシュ!!」

「燃えろ! サラマンドラ・ブレイズ!!」

ウエンディーヌ・スプラッシュ
【精霊水】

二つの精霊魔術が真っ向からぶつかり合う。陰の性質を持ったレイの水、陽の性質を持ったツカサの炎。二つは力が均衡であったため、互いに中和し魔力相殺を引き起こした。

「うわっ！」

「くっ！」

二人は踏ん張りながら、相殺の際に生じた衝撃波を受け流す。相殺した魔術の規模が半端ではなかったため、発生した衝撃波も相当な力を持っていた。

「これが……魔力相殺」レイは静かに呟く。ランクの低いレイは白兵戦などほとんどしておらず、今まで魔術をぶつけ合う事など全くなかった。故に魔力相殺を見るのはこれが始めてだった。

「さあ、どんどん行くよ」ツカサは大剣を構えると微笑む。

「くっ！ 出せる力は、全部出す！」レイはレーヴァティンを握り直すと、ツカサに切り掛かった。

FileIII「模擬戦闘」

著者：ユナ・アサクラ

File・III「模擬戦闘」（後書き）

File：キャラ設定

【レイ・グランドリオン】 属性：炎

漆黒の髪と瞳を持つ、心優しき青年。封印の魔剣・レーヴァティンを操る皇国軍のBB＋魔術師。炎属性を得意とし、ランクを遥かに上回る最強クラスの魔術カードを軽々と操る。

父親と母親を戦争で亡くしており、幼少時から祖父のルーファウス・グランドリオンに育てられる。レーヴァティンはそのルーファウスから受け継ぐ。パトリシア・グランドリオンとは従兄妹同士の間柄。

【パトリシア・グランドリオン】 属性：風

レイの従兄妹。レイよりも年下であるが、戦争には長く参加しているため、戦闘技術などはパトリシアの方が上。愛称、パティ。兄思いだが素直ではなく、不器用との評判。

無限に展開される秘宝、三種の神器・八咫鏡を操り、多彩な魔術攻撃を用いる。隊長クラスの権限。ランクSで、強力な属性魔術も操ることができる。

【ツカサ・オルディラン】 属性：地

皇国軍最強、と謳われるSSランク+の魔術師。ありとあらゆる魔術を多彩に操り、どんな苦境をも引っくり返すと言われる強力な戦闘の達人。穏やかな性格で、皇帝のリオフアネス・オルディランの養子。

自分の背丈よりも巨大な大剣を操り、素早い身のこなしと幾重にもわたる魔術で戦闘を進める。王国軍最強のエドワードと直接手合わせたことはまだない。

File・III「有給休暇」

「西方基地」

「有給バンザイ！」基地の隊長室に甲高い声が響き渡る。

「普段、ろくすっぽ仕事してねえ奴の言うセリフじゃねえな……」

そんな声に律義にツツコミを入れるエドワード。声には呆れがふんだんに込められており、対するエーリンはムツとした表情を作る。

「うつさい。必要最低限の仕事はしてるわ」エーリンは拗ねたように顔を背ける。

「最低限、な。さすがに落としたらマズいな、って仕事しかしねえじゃねえか」エドワードはかつたるさを隠しもせず言う。

普通ならクビになってもおかしくないエーリンであるが、その仕事の正確さと戦いの腕から、西方基地隊長を任せられ続けていた。

「固い事言いつこなしさ。とりあえずアタイのお陰で西方基地は機能してるんだからさ」

「兵の仕事と労力に支えられてな」エーリンの言葉に冷たくツツコミを入れるエドワード。

「な、何さ？今日は珍しくツツコミに回ってるけど」エーリンはやや引き気味に聞く。普段のエドワードはボケでもツツコミでもない。

「…………俺がツツコミ入れなきゃ誰がお前のアホ加減を窘めるんだよ」

国王から龍討伐の任務を受けたと同時に、任務開始まで一週間の休みをもらったエドワードとエーリンは西方基地でのんびりしていた。

「全く、アンタは昔っからそうなんだよ」エーリンは腕を組みながら言う。

「お前も昔からそうだからな」対するエドワードは言葉にできる限りの皮肉を込めて言い放つ。

「何？ アタイが昔からどうしようもないバカで人に迷惑ばっかかけて、そんなアタイにいちいちツツコミ入れてるんだから昔からエドワードが変わらないのは仕方ない、とでも言いたいのか？」落ちて着いたエドワードを勢いで押し切ろうと体ごと迫るエーリン。

「ああ。まさにその通りだ」エドワードの方は全く動じずに返す。その淡泊な返答にエーリンは一瞬何と攻めるべきか言葉を失う。

「つまりは、お前がおしとやかなら俺は問題無くツツコミの立場を引退できる訳だ」

エドワードは容赦無くトドメの一撃を叩き込む。

「……………うう、エドひどい」エーリンはエドワードに背を向け、手を目に当てる。

「今更泣きまねなんて通じねえよ」エドワードは手をヒラヒラふつて告げる。エドワードとエーリンの漫才では付き物のやりとりであった。

そうして、彼らは休息の時間を消費していった。

く王国西方都市・ベルギウスく

古くなったマントの新調と靴の修繕のために、王国最西端の都市、ベルギウスを尋ねて来たエドワードとエーリン。ちなみに、エーリンは消耗品の補給のために来ただけである。しかし……………
「おっちゃん！ 焼きもちこしーっ！」

「はいよっ。……………って隊長じゃねえか。また食べ歩きかい？」

「いやいや、今日は買いい物に付き合ってるだけだよ。ああ、タコ焼きも追加で！」

これはあくまでとあるワンシーンの抜粋である。この街に来た事で一番楽しんでいるのはエドワードではなく、ましてや他の誰でもなく、エーリンなのであった。

「………… お前、俺のお供だつてマジで理解してるのか？」エドワードは両手に山のような食べ物を抱えるエーリンを眺めながら言う。「うん。アタイはここに来る度にこういう事してるから気にせんでいいよ」エーリンのあっけらかんな返答に頭を抱えるエドワード。「………… もう何でもいいか」エドワードはエーリンの腕の中からリングを抜き取りかじつた。

街の食べ物全てを食べ尽くそうと画策している（ような勢いで食べる）エーリンと一旦別れたエドワードは衣服店で新たな漆黒のマントを買った。

そして、靴の綻びを塞ぐために靴屋に向かうのであった。

「エーリンの多食らいは相変わらず、か」エドワードは通りを眺める。エーリンが通った道に並ぶ店の店員は確実にニコニコしている。それだけ人徳があるのである。

「しかし、あの活気だけでここまで人気が出るか？」エドワードは静かに呟く。エーリンは昔から変わらずにテンションが高いのが売りである事をエドワードは知っていた。

だが、些か腑に落ちない点があった。いくら明るい人間はいえ、今のエーリン程の人気はでないであろうところである。まだ、何かの要素があるはずだと考える。

「だとしたら、何がエーリンの人気を高めてるのか……………」

「引つたくりだ〜っ！！」エドワードの思考を裂く大声が突然上がる。エドワードが声のした方を見ると、グラサンにマスクという変態丸出しながたいのいい男が茶色いバッグを抱えて猛ダッシュしていた。

「バカだな。今どき引ったくりなんて袋叩きに合っただけなのにな」
エドワードは背中中の槍を手にとると一步踏み出す。

「ん？」しかし、二歩目は出なかった。引ったくり犯がダッシュする方向は皆が避けているため開けている。そんな中にエーリンが一人、ポツンと立っていた。それを眼の端に捉えたエドワードは足を止めていた。

「どけえ！！ 女ア！！」マスクを通し、曇った罵声が上げられる。しかし、エーリンはどかなかった。それどころか、引ったくり犯に向かって走り出した。

「しゃらくせえ！！」引ったくり犯はエーリンを吹っ飛ばそうと腕を振り上げる。

「うっさいよ、バカ」対するエーリンはそう言い放つと、腰を軽く落とし構える。

バキィー！！

次の瞬間、男が吹っ飛び、エーリンが着地する。間合いに入った瞬間、ドラゴンサマーソルトを男の下顎に叩き込んでいた。

「ハアッ！！」着地と同時に跳び上がると腰から武器を取り、構える。

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

エーリンの手に握られた小振りの双銃が火を噴く。俯せに倒れる男の顔の真横、左右に三発ずつ、それぞれスレスレの位置に弾丸を放っていた。

「アタイの眼が黒い内には西方じゃ犯罪なんか起こさせないよ」男の真正面に立ちながら言い放つ。男は完全に失神していた。もっとも、エーリンのどの攻撃で気を失ったのかは分からないが。

「……なるほどな」エドワードは納得していた。

エーリンの正義感の強さは昔から半端ではなかった。この戦争に参加しているのも、エーリンの周りにいる人間を守るため、と言っていたのをエドワードは思い出していた。

「あんだだけの事してりゃ、一般人には好かれるだろうな」エドワードは小さく笑みを浮かべた。まっとうに生きている人間には好かれ、闇に塗れる人間には疎まれる。

「エーリンらしいな」

「エドー！ こいつ、連行すんの手伝って！」いつからエドワードに気付いていたのか、大声で呼ぶエーリン。どこから出したのか、男はロープで縛られていた。

「しゃあねえな」エドワードはグングニルを背負い直すと、エーリンの下に向かう。

「どこに連行したらいい？」エーリンはロープを片手で握りながら尋ねる。

「お前な、自分が西方基地の隊長だって知ってて聞いてんのか？」エドワードは溜め息混じりに聞き返した。各基地はその周辺の事全般を請け負っている。それは、無論犯罪に関しても然りであった。

「だって面倒だし」

「どうせお前は何の仕事もしねえだろ。つか、お前が仕事してるの見た事ねえぞ」エーリンの反論、もといわがままを弾き返すエドワード。

エドワードは一枚の魔術カードを取り出すと、魔力を展開する。
「今日はもう帰るぞ。エアーのカードで転送してやるから」エドワードはエーリンの手からロープをとると詠唱を始めた。

“空よ、我が存在をその流れに委ね転移させよ！”

「仕様がなか。エド相手に口で敵うはずないし」エーリンはやれやれと肩を竦める。

「飛ぶぞ……エアー！」エドワードはエーリンに対するツッコミを全て我慢し、一陣の風を呼び起こす。

【^{エアー}空】

次の瞬間にはベルギウスからエドワードとエーリン、引ったくり犯の姿は消え去っていた。ちなみに、エドワードが靴の修繕を忘れていた事を思い出したのは男を牢に繋いで隊長室に戻った後の事だった。

File・III「有給休暇」

著者：ユナ・アサクラ

File・III「有給休暇」（後書き）

【エドワード・ヴァレンタイン】 属性：水

王国軍に属するSSSランクの魔術師。白銀の瞳と長髪を持ち、王国最強とされる。その鬼神の如き戦いぶりを形容されて『白銀の戦闘師』、『エース オブ ザ カード』などと呼ばれる。

壊滅の神槍・グングニルを操り、最強クラスの魔術カードを次々と使用する。どんな悪環境でも戦闘を勝利へと導く守護神。負け無しと有名。しかし、心の底では……

【レミリア・オルザナドゥ】 属性：地

王国軍の魔術師で、エドワードとよくペアになる。無口で無表情。故に、付き合いの長いエドワードがエーリンでないと考えが読めない。人殺しは嫌いなので、戦闘の際は寸止めを心がけている。

無限の短刀・ゾーリンシェイブを操り、遠距離、近距離、両方の魔術を操る。短刀そのもののリーチの短さをカバーできるよう、投げナイフがかなりうまい。ちなみに、戦闘能力はエーリンよりも上。

【エーリン・ラグラドル】 属性：炎

王国軍にて、西方基地の隊長。まがった事が嫌いで、正義の味方を自負する。一人称はアタイと変なもので、テンションも女の事とは思えない。エドワードよりも年上だが、舐められまくっている。

双銃を操り、魔術よりは体術などで戦闘を進める。AAAランク+なので、そこそこに強力な魔術を扱う事もできる。戦闘そのものにはあまり参加しないが、かなりの戦闘能力を持つ。

今回は、ともにキャラ設定をあとがきに入れました。ネタは
れないので裏設定程度に読んでおいてください。次回は世界観な
どの設定をいれるつもりです。

魂喰に比べると、投稿ペースがかなり遅いですが、温かい目で見
守って頂けると嬉しいです。感想&評価も募集中！どんどん書き込
んでください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5494c/>

闘争の渦【長期休載中】

2010年10月10日21時50分発行